

---

● 書 評 ●

---

PERENDY László

*Antiokhiai katekézis a II. század végén:*

*Theophilosz püspök munkássága*

(ベレンディ・ラースロー 『2世紀末におけるアンティオキアの

教理教育：司教テオフィロスの事績』)

Litteratura Patristica 4., Budapest: JEL Könyvkiadó, 2012, pp. 623.

ISBN 978-963-9670-98-3, A/5, 3200 Ft.

---

秋 山 学

本書は、ハンガリーの首都ブダペシュトにあるパーズマニニペーテル・カトリック大学神学部の教父学講座責任者、ベレンディ・ラースロー教授による単著であり、ブダペシュトのイェル（「しるし」の意）出版社より『教父文献叢書』（Litteratura Patristica）の第4巻として公刊されたものである。本書を手にする者は、おそらくまず600頁を超えるそのボリュームに圧倒されることであろう。以下、1) ベレンディ教授の略歴と関連事績、2) 本書の意義 について相互に関連づけながら、評者に可能な限りにおいて本書を評してみたい。

ベレンディ教授は1954年、ハンガリー西部の町ゲルシェの生まれである。中南部の中心都市ケチケメートにあるピアリスタ修道会のギムナジウムを修了後、同会に入会し、ブダペシュトのエトヴェシュ・ローランド大学にてまず生物化学と英語学を修め、その後2000年にベルギー・フラマン語圏のレウヴェン・カトリック大学にて神学博士号を取得された。この間、修道会経営のギムナジウムでの教員生活を経ながら、2000年にブダペシュトにある諸修道会合同運営のサビエンティア神学院・教父学教授となり、2004年9月から現職を併任しておられる。そして本書の基となる論文で教授資格を取得し、2011年には正教授の地位に就かれた。神学部教授の傍ら、歴史学部門でも論文指導を行っておられるとのことで、実証的教父学の趣は、本書からも十二分に味わうことができる。

ハンガリー・カトリック神学の伝統を重んずるパーズマニ大学のポストをめぐっては、層の厚い同国教父学を反映して激しい競争があったと聞くが、ペレンディ師は国際派の旗手として新たな息吹を吹き込むことになった。現在精力的に取り組んでおられるのが「ヨーロッパ・カトリック神学協会」(ESCT)・ハンガリー一部局代表者としての役職である。これはヨーロッパの計 21ヶ国がそれぞれ各国部局を編成し、毎年定例会議において、カトリック神学の直面する問題を討議する学会である(ちなみに評者もペレンディ師の勧誘に説得され、ハンガリー・メンバーの一人になっている)。その傍ら、かつてヴァティカンの神学委員会・ハンガリー代表委員をも務められたヴァニョー・ラースロー師(1942-2003)の講座後継者として、ハンガリー国内の各種教父学関係企画に関わる重責をも着実にこなしておられる。その代表的なものが、ヴァニョー師の創設になる『古代キリスト教著作家集』(Ókeresztény Írók; 2009年現在、既刊計 20巻)の主幹編集者としての任である。一方、本書が収められた『教父文献叢書』に関しては、ハンガリー・ギリシア=カトリック・ミシュコルツ司教オロス・アタナズ師らとともに編集委員を務めておられる。また「第 1 一千年紀のキリスト教文献・選文集」との副題を持つ『教父たち』(*Patres*; =カトリック中央協議会 1991年刊『毎日の読書~「教会の祈り」読書第二朗読』全 9巻)のハンガリー語版編集も特筆されよう(2011年刊)。日々教育と奉仕に献身する、修道司祭としての篤実なお人柄が伝わってくる方である。

そのようなペレンディ師が、2009年に教授資格請求論文(Habilitáció)として提出したのが本書である。本書を一言で要約するならば、アンティオキアのテオフィロス(188年ごろ没)、およびその著書『アウトリュコスに宛てて』に関わるすべての問題を網羅的に詳説し、原典資料と関連研究文献とを悉く収録した大著、ということになるであろう。テオフィロスのこの著作(全 3巻)に関しては、今井知正氏による解説と日本語訳(平凡社 1995年刊『中世思想原典集成』第 1巻「初期ギリシア教父」所収)が存在するが、少なくとも本邦にあっては、この教父とその著作が、これほど大きな研究書を生み出すことになるとは、想像することすら困難である。この秘密の理由はどこにあるのだろうか。

評者は、ハンガリーで開かれる二つの学会、すなわち「ハンガリー教父学協会年次大会」(6月末)および「セゲド国際聖書学会」(8月末)においてペレンディ師に会うことが多い(師は教父学協会評議員の一人)。オクスフォード国際教

父学会（2015年8月に第17回開催）での口頭発表を勧めてくれたのも師である。教父学会と聖書学会をともに研究のためのペースメーカーとし、毎年欠かさず口頭発表を行う師の姿は、評者にとって一つの規範である。ベレンディ師のこのあり方は、本書にもそのまま反映されている。アンティオキア教会第6代司教のテオフィロスと同市の歴史をめぐり、師は『使徒行録』『マカベア書』およびフラウィウス・ヨセフス、エウセビオスさらにはヨハネス・マララスの関連原典箇所を遡って実証的解説を行う。本邦では、『旧約・新約聖書大辞典』（教文館1989年刊）の項目にも上がらず、巻末の年表にのみその名が見えるような諸シリア総督の系譜を順に辿りつつ、本書では、ヘレニズム時代から後2世紀までのアンティオキアの状況について、冒頭の約100頁を割いて詳説が行われる。評者は、教父研究をこのように聖書学から説き起こす師の姿勢にまず共感する。以下、本書の構成を目次に従って紹介することにしよう。

本書は、章節番号が付されていないものの、「序論」と「総括」、および計27頁に及ぶ巻末文献目録を除き、計6部により構成されている。それは順に1「アンティオキア教会誕生の前夜」、2「後2世紀におけるアンティオキアの教会」、3「テオフィロスの哲学的・宗教的環境」、4「テオフィロスの経歴」、5「テオフィロスの事績」、6「テオフィロスの影響」である。このうち第5部が400頁以上を占め、本書の中核部を成す。ただし上述のように全編で実証が尽くされ、聖書学、哲学史、グノーシス、古典学関連のハンドブックとしても有用である。

以下、各部の章・節・項題目を示すならば、第1部が「シリア・アンティオキアの歴史」、 「アンティオキアにおける異教」、 「イスラエル人ディアスポラに関する原典史料」、 「アンティオキア教会の誕生：新約聖書諸書」、 第2部が「聖イグナティウスによる誤謬教説との格闘」、 「アンティオキアのグノーシス主義」、 「タティアノス像」、 「バルデサネス」の各章より成る。タティアノスに関連しては、修道主義の起源をエジプトではなくアンティオキアに、従来よりも約100年ほど遡らせて求めたいとする重要な提言が行われている（91-2頁）。第3部は「ギリシア哲学」と「テオフィロスに与えたユダヤ教の特筆すべき傾向の影響」で構成される（第4部に下位章節はない）。そして本書の主要部分を構成する第5部は、1) 「3巻より成る『アウトリュコスに宛てて』」、 2) 「護教家テオフィロス」、 3) 「詩人たちおよび歴史家たちへの批判」、 4) 「哲学者たちへの批判」、 5) 「釈義家」、 6) 「教理教育者」、 7) 「神学者」、 8) 「異端反駁者」の各章より成り、テオ

フィロスの主著『アウトリュコスに宛てて』をめぐって、この司教の多面的な特質を個々順に吟味しつつ、先行研究に対する批判的な検討が行われる。詩人・史家に関する記述では、特に神論をめぐり、主としてゼーガース＝ファンデル・フォルストの研究（1972年）に依拠しつつ、オルフェウスやホメロス、ヘシオドスら神話詩人たちに対してのテオフィロスの批判的見解が吟味され（249-304頁）、師が古典古代学に通じていることをうかがわせる。

第5部第4章および第7章は、下位に節・項部分をも従える厚みを見せる。特に第7章は「神論」、「創造の神学」、「ロゴス論」、「聖霊論」、「三位一体論」、「キリスト論」、「終末論」の各節より成る。テオフィロスの神学は「キリスト」の登場しない「キリスト教」として夙に著名であるが、その一方でテオフィロスは、三位一体に関して「トリアス」(trias) という語彙を初めて用いた著作家としても知られる（『アウトリュコスに宛てて』第2巻15）。この謎めいた著作を、諸先行研究を丹念に辿りつつ重層的に解明して見せるこの第5部第7章にあっては、特に第2節「創造の神学」に多くの項が割かれている。下位の項目を追うならば、「創造された世界の特質」、「神は万物を創造し、神が万物を支配すること」、「無からの創造」、「すべての被造物は善であること」、「被造物における人間の比類なき位置」、「被造物には秩序があること」、「全被造物は人間に仕えること」、「神と被造世界との関係」となる。テオフィロスは「無からの創造」を初めて唱えた神学者として著名であり、『アウトリュコスに宛てて』第2巻で『創世記』第1-11章「原初史」の注解が行われることもよく知られているが、ペレンディ師は特にこの「原初史」の記述に基づき、テオフィロスの神学的特質の解明に努める。そして第6部は、順に「エイレナイオス」「テルトゥリアヌス」「ヒッポリュトス」「ラクタンティウス」の各章より成り、西方世界にもテオフィロスの影響が甚大であったことが実証的に記述される。

従来の教父学通説書では、テオフィロスは護教家の一人に、また『アウトリュコスに宛てて』は護教的著作に分類されるのが常であった。けれどもこの著作を「教理教育書」(カテケジス)として位置づけ直すことにより、ペレンディ師はアンティオキアの持つ歴史的な特質を浮かび上がらせることに成功している。師によれば、『アウトリュコスに宛てて』は、その神学的内容の広がりから見て、エルサレムのキュリロス(315-386; 348年頃よりエルサレム司教)による『カテケシス』(大島保彦訳『洗礼志願者のための秘義教話』として平凡社1992年刊

『中世思想原典集成』第2巻「盛期ギリシア教父」に所収)へと連なるものを有する(366;595頁)。願わくは、アンティオキアそしてエルサレムの典礼次第にも通じていただき、典礼史学の側面からも古代アンティオキアに迫ることをペレンディ師に要請したくなるのは、おそらく評者だけではあるまい。諸方面への学的関心を呼び覚ます好著として、本書を広く推奨したい。

追記：ペレンディ師は、2016年8月18日付でハンガリー国家名誉騎士十字章を授与された。ここに祝意を表したい。